

# 全電源喪失の記憶

証言 福島第1原発

## ■第2章「1号機爆発」

陸上自衛隊郡山、福島両駐屯地の

消防車を率いてきた第6特科連隊

(郡山市)の渡辺秀勝陸曹長(49)は

3月12日午前8時半、隊員11人と

もに福島第1原発の免震重要棟に

入った。1階は人であふれ、廊下や

階段に横たわる多くの作業員から

は、突然入ってきた迷彩服の集団に

驚きと期待の混ざった視線が注がれ

た。

「消防車による原子炉冷却」という

任務を聞かされたが、原子炉の状況

や、構内の放射線量について詳しい

説明はなかった。

1号機原子炉には東京電力所有の

8

## 吉田所長の「次の一手」



福島第1原発4号機の「逆洗弁ピット」(中央)。逆洗弁ピットは各機種の海側にあり、特に3号機のピットには津波で流れ込んだ海水が大量にたまっていた。2月

# 陸自の消防車で注水

袋の上に極薄のゴム手袋2枚、靴下を連結して海水をくみ上げ連続注水できるか。貯水槽の真水は底を全面マスクを付けて防護服のフーツきかけていた。

トをかぶると、顔の周り、手首、足首は隙間がないようフツで巻かれ隊だ。3号機海側に「逆洗弁ピット」という大きな立て坑があり、津波のため措置だが、マスクに付いた水をくみ上げ、1号機まで移動して注水を繰り返していた。

「貯水槽がほとんど津波でやられてしまいました。注水に使える水を探索してください」

東電側の要請で、渡辺はまず福島消防車を現場に出し、1時間で郡山と交代せよと命じた。郡山駐屯地の佐藤智2等陸曹(44)ら5人も準備

を始めていた。5人は防護服に着替えることになった。迷彩服を脱いで長柄、長丈ボツの下着を付け、つなぎになってい昌郎(56)が陸自の消防車を使った

「次の一手」を考えていた。消防車同通信 篠原雄也

出かける時、新たに着替えた。一方、免震棟2階では所長の吉田

ら、免震棟内の汚染を防ぐため、戻るたびに装備を脱いで廃棄し、また半。車内の誰も想像すらしなかった

1号機原子炉建屋の水素爆発が迫っていた。

1号機原子炉建屋の水素爆発が迫っていた。